

身近な乗り物で 日々起こる珍事件!?

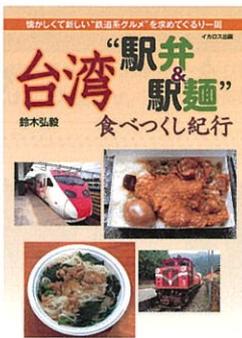
私の統計では、バスが好きという人は学年に一人はいる。衝撃的だったのは学生時代、学校から駅までの通学バスを私の後ろで待っていたはずの「バス男」くんが、駅に向かう途中の車窓に見えたとき。バスに向かって手を振っている。え？ なんで？ ワープした？ 混乱したが、彼はそのバスには乗らず、違う系統で移動したらしい。そんなこともあってか(?)、気になる存在のバス。路線バスの企画を考えていたこともあって、この本が目に残った。

10年ほどいた長野市から実家のある「だや市」に戻り、ひょんなことからバスの運転士になった著者の仕事ぶりが描かれたエッセイだ。わがままで変わった乗客がいたり、ありえないようなクレームをつけられたり、かと思えば、ハートウォーミングな出会いがあったり、バスという密室で繰り広げられる人間ドラマは面白い。その裏で時間との闘いや、接触事故の怖さなど、苦悩も読み取れる。数々のエピソードを読みながら、バスの運転士は接客業だなと改めて感じた。乗る側もいい客になりたいものだ。著者のオヤジギャグは可愛敬かな。(編集部・長谷川)



バス運転士の後ろ姿

松井昌司=著
幻冬舎
1100円/四六判



台湾“駅弁&駅麺”食べつき紀行

鈴木弘毅=著
イカロス出版/1320円/A5判

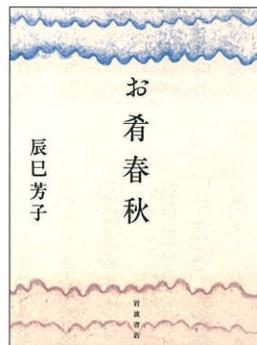
駅ナカグルメのエキスパートである著者が、台湾全土を鉄道でめぐり、駅弁と麺を食べまくる。牛肉麺、排骨飯などおいしいようなメニューが次々と登場し、駅や鉄道も細かく描写している。読んでだけで旅気分。弁当箱一つとってもプラスチック製、紙製、木製など幅広く、形も丸、八角形とさまざま。パッケージも地元感があっていい。



東京発 半日徒歩旅行 調子に乗ってもう一周!

佐藤徹也=著
山と溪谷社/1100円/新書判

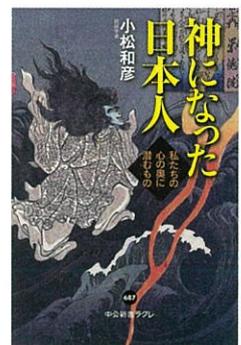
東京発の普通列車で、朝寝坊してから出かけても間に合う、事前予約がいらない場所への半日徒歩旅行というコンセプトのガイドブック第2弾。著者が気のおもむくままに選んだ、溪谷や棚田、ケーブルカーや渡し船などの乗り物、島や里山、旧道など、ふらりと出かけてみたいと思わせる“ちょっといいところ”が絶妙で楽しい。



お肴春秋

辰巳芳子=著
岩波書店
1980円/四六判変形

料理研究家の第一人者として知られる著者が、季節ごとの「酒の肴」にテーマを絞って綴るエッセイ。求道的ともいえる仕事ぶりから、手間隙かけた難しいメニューが並ぶのか?とつい身構えたが、シンプルな一品も多く、シタケステーキは真似してすぐ作ってしまった。揚げ物や野菜の茹で方など、基本的な料理のコツもちりばめられている。



神になった日本人

小松和彦=著
中央公論新社
990円/新書判

日本には、平将門や徳川家康のように、実在した人物が神(仏)として祀られている社寺が多数ある。代表的な11人がなぜ“人神”となったのか、そのプロセスや物語を詳説。ゲリラ戦に長けた一介の武将だった楠木正成が、幕末の尊王攘夷派に再発見され、忠臣のシンボルとして神格化され、利用される過程がとりわけ興味深い。